

チョムスキー
ボストンマラソン爆破事件とテロ国家アメリカの過去・現在・未来

Boston and Beyond

May 03, 2013

By Noam Chomsky

Source: Truthout

Noam Chomsky's ZSpace Page

<http://www.zcommunications.org/boston-and-beyond-by-noam-chomsky>

翻訳：寺島隆吉、公開 130525



4 月は普通、ニューイングランドでは華やかな月だ。春の息吹が感じられ、ついに厳しい冬が去ったという気分になるからだ。ところが今年はそうではなかった。

4 月 15 日(月)のマラソン爆破事件とその後の緊張した 1 週間に、何らかのかたちで心を揺り動かされなかったひとは、ほとんどいないだろう。私の友人も何人かは爆破が起きたときマラソンの最終地点にいたし、二人目の容疑者である Dzhokhar Tsarnaev が逮捕された場所の近くに住んでいる友人もいた。そして若い警官 Sean Collier が殺されたのは私の研究室がある建物のすぐ外だった。

しかし欧米人は特権的階層に属するから、毎日のように同じ残酷な光景のなかを生きる他の多くのひとたちのことを知らないし、そのような光景を目にすることはほとんどない。たとえば、ボストン爆破事件と同じ週に、同じような光景がイエメンの辺鄙（へんび）な部落で展開されていた。

イエメンの活動家でありジャーナリストである Farea Al-Muslimi は、かつてアメリカの高校で学んだことがある若者だが、彼は 4 月 23 日(火)、上院の委員会で証言した。マラソン爆破事件の直後に、彼の生まれ故郷であるイエメンの部落で、無人殺人機 Drone の爆撃で標的とされたひとを含む多くが殺害された、と。（訳註）

その爆撃は村人を恐怖に追い込み、彼らをアメリカの敵に変身させた。それは、アメリカにたいする聖戦を吹き込もうと何年にもわたって努力してきた連中が、いまだに達成できなかったことだった。

活動家 Al-Muslimi は証言した。その近隣の人たちは今までアメリカを崇拝・賛美していた。しかし「今では、アメリカというと、頭上を旋回する無人殺人機、それがもたらす恐怖のことしか思い浮かばない。今まで過激派の人たちが達成しようと努力しつつも失敗してきた目標を、一発の爆撃が一瞬で達成させた。」

国際的暗殺計画 (global assassination program) はオバマ大統領にとっても勝利を与えてくれるものだ。それは、我々に危険をもたらす可能性がある容疑者を国内で殺すよりも、もっと急速に (アメリカにたいする敵意だけでなく) アメリカ市民の恐怖感をかきたて [アメリカを監視国家にしやすい] からだ。

活動家 Al-Muslimi によれば、イエメンの部落における暗殺は住民にかかってないほどの恐怖をもたらしたが、その暗殺対象になった人物は村人のよく知っている人物だったから、逮捕しようと思えば簡単にできたはずだ。これが「国際的テロ作戦」と言われるものによく知られたもう一つの特徴だ。

ボストン殺人事件を防ぐ直接的な方法はなかった。しかし似たような事件を今後おこさないようにする容易な方法は幾つかある。それは相手を挑発しないことだ。

同じことは、もうひとりの殺害された容疑者についても言える。彼の死体は司法解剖されないまま太洋に投げ捨てられた。彼の場合も容易に逮捕できたし裁判にかけることもできた。誰のことか。ビンラディン (Osama bin Laden) のことだ。

ビンラディンの殺害も重大な結果をもたらした。彼の居場所をつきとめるために CIA は近隣の貧困地区に詐欺的な予防接種を実施した。そして、その地区住民にたいする予防接種を終えないうちに、その活動をビンラディンの住む裕福な地域に移動した。

この CIA の作戦活動は、「ヒポクラテスの誓い」と呼ばれる医療の倫理原則を犯すものだ。それは同時にパキスタンでポリオ予防接種計画にたずさわっていた国連の医療関係者を危険にさらすものでもあった。というのは、彼らのなかには [CIA の作戦と間違われて] 誘拐され殺害されるものも出てきたからだ。こうして国連はポリオ撲滅部隊の撤退に追い込まれた。

この CIA の戦略は、同時にまたポリオから身を守る術 (すべ) を奪われたパキスタン人を数多く死に追いやることになるだろう。というのは、彼らは外国の殺人者 CIA がいまだに予防接種計画を利用した作戦をするかもしれないと恐れて、ポリオの予防接種を受け

なくなる可能性があるからだ。

コロンビア大学で健康科学を専門とする Leslie Roberts の見積もりでは、この事件の影響で 10 万人のポリオ患者が生まれる可能性があるという。彼は『Scientific American』誌で、「将来、ひとびとは、この病気で肢体不自由児が出てきたのはアメリカがビンラディンを手に入れることだけに狂奔したからだ、と言うだろう」と述べている。

そして彼らパキスタン人のなかには、自分たちを苦しめた連中を[アメリカ人]を恐怖させたり激怒させたりような方法で報復するものも出てくるだろう。それは不当な扱いを受けた人たちがしばしば取る行動だからだ。

もっと深刻な結末になっていたかもしれないが、かろうじてそれは免れた。というのはアメリカ海軍特殊部隊 SEAL は、ビンラディンを殺害したあと必要とあれば軍事力を行使してでも現地パキスタンから脱出せよとの命令を受けていたからだ。パキスタンは国家を守るために良く訓練された軍隊をもっている。侵略者である特殊部隊 SEAL がパキスタン軍と相対峙していたら、ワシントン政府は SEAL をパキスタン軍の手に委ねるわけにはいかなくなるから、アメリカの殺人装置を全力展開させて救出に向かっただろう。それは核戦争にもつながりかねないものだった。

国家が民衆の運命を危険にさらすことがあることを示す、非常に教訓的な長い歴史を、我々はもっている。それは国家政策という名目でおこなわれ、時には[核戦争を誘発して]人類を滅亡させかねないほど深刻なものになることもあった。とくに世界で最も大きな軍事力を誇る大国がそうだ。我々はそれに目をふさぎ自分たちを危機におとしめている。

今やそれを無視することは許されない。調査記者ジェレミー・スケイヒル (Jeremy Scahill) が出版したばかりの『汚い戦争：世界中が戦場だ』(Dirty Wars: The World Is a Battleground) があるからだ。

スケイヒルは、アメリカの軍事作戦、空からのテロ爆撃 (無人爆撃機 Drone)、政府による JSOC [統合特殊作戦コマンド] の採用などが地上にもたらす影響を、背筋も凍るような詳細さで叙述している。この JSOC はブッシュ大統領の下で急速に拡大し、それをオバマ大統領は武器のひとつとして選択した。[JSOC: the Joint Special Operations Command]

ここで注目すべきなのは、作家であり活動家である Fred Branfman による鋭い研究である。彼はほとんど独力で、アメリカが 1960 年代にラオスでおこなった「秘密の戦争」の真の恐ろしさと、その後遺症を暴露したからだ。

今日の「JSOC - CIA - Drone」のつながりを考えると、Branfman は私たちに、1969 年に Monteaule Stearns が上院でおこなった証言を思いおこさせる。

スターズ (Stearns) は 1969 から 72 年にかけてラオス特使代理だったが、「ジョンソン大統領が 1968 年 11 月に北ベトナムへの爆撃を中止したのに、その後なぜ急にラオスへの爆撃を拡大したのか」と尋ねられ、次のように答えた。

「北ベトナムへの爆撃が中止になり、することもなく待機している爆撃機が多くなったので、それを放置しておくわけにはいかなかった。」

そこで待機している爆撃機を使ってラオス北部の寒村に住む貧しい農民たちを爆撃して、洞窟に追い込んだだけでなく、我々の最新技術を用いて洞窟内にいる農民たちを串刺しにしたというわけだ。

JSOC と Drone は、成長し拡大する自己増殖テロ装置で、世界中を一掃しながら新しい潜在的な敵をつくりだす。政府も彼らを「ぶらぶら待機」させておきたくはないだろう。

もう一つ、歴史のひとこまを熟考してみるのも悪くないだろう。20 世紀の幕開けに起きた出来事だ[米比戦争 1899-1913]。

歴史家マッコイ (Alfred McCoy) は、著書『アメリカの帝国を警察する：合州国、フィリピン、そして監視国家の起源』"Policing America's Empire: The United States, the Philippines and the Rise of the Surveillance State" のなかで、蛮行と拷問をはたらきながら侵略した後、アメリカがどのようにしてフィリピンに乗りだしていったかを鋭くめぐり出している。

上記の著書でマッコイ y が暴露しているように、フィリピンの民衆支配に使われて成功した方法は、間もなくアメリカにも適用されることになった。ただし手荒なやり方を少し抑えてはいたが、いずれにしても魅力的なものではなかった。

同じことが今度も繰り返されるだろう。権力を独占するものたち（とくに政府）を規制せずに野放しにすることの危険性は、古くから知られていることだ。ではそれにどう対処するか。黙従を拒否すること—これに尽きる。

< 訳註 1 > イエメンにおける無人殺人機の爆撃については下記を参照。

Yemeni Activist Farea al-Muslimi Urges U.S. to Stop the Drone War on His Country

http://www.democracynow.org/2013/4/25/yemeni_activist_farea_al_muslimi_urgues

< 訳註 2 > ラオスにおける Fred Branfman の活動については、寺島研究室 HP 「翻訳コーナー」の「私はチョムスキーが泣くのを私は見た」(1-6) を御覧ください

寺島研究室 HP

<http://ieas.web.fc2.com/>

http://ieas.web.fc2.com/translation_index.html